た、又氏が如何に書畫を愛好せられたるかは、先年故あつて其秘藏の大部分を他に讓渡された時に、「子に別れるよりも辛い」と申された一言によつても知ることが出來やう。

氏は行事に几帳面であり、且時の觀念に厚かつた、書信に對して頗る嚴格で、毫も之を等閑に附せられなかつたことの如き、又宴會に列席せられた樣な場合でも、宅を出るとき豫め告げ置かれた刻限には必ず歸宅られたことの如き、率ね此類である、麥畑に巢を拵へた雲雀が恐れたる百姓ではないが、今日爲すべき事を明日に延すやうなことは全く無かつた、其地位に伴ふ種々の會合等の爲に、歸宅が深更に及んだ場合にも、當日の來信の處分を終へないでは就寢せられなかつたのも、亦氏の性格が然らしめた所か、氏は又外出に際しては必ず兩三回其手廻り品を點檢せられた、かの一たび門を出て後忘れ物を呼ぶが如き事の、未だ嘗て無かつたのは宜なりである、更に如何なる贈遺を受けられた時でも、其返禮を怠られなかつた樣な事も、亦氏の嚴正なる氣質の一面を語るものではあるまいか。

氏の懇切の德は、亦如何ばかり其家庭の零圍氣を敦化し美化したことであらう、長

老親眷知友より、其下僚使用人に至るまで、氏が之に對する態度は極めて親切丁寧であつて、禮讓を以て接せられた、又珍異の品があれば必ず之を近親等に分與し、人の喜ぶのを見て自ら喜ばれた、子女や召使等に事を命ぜられた場合にも、其終つた時には必ず「ヤア有難う」なる謝辭が氏の唇から出ないことはなかつた。

ベーコンは嘗て「沈默は聰明を養ふべき睡眠なり」と曰つた、今氏に就いて見るのに、氏が平素寡言沈默の人であつたことは、世人の齊しく認めて居た所、家庭に於ても亦同樣であつたが、而も其平素の沈默に依つて養はれた聰明は、來訪の客の前に眞摯率直の辯を以て縱橫に躍動した、氏は訪客に對しては善く語つて倦ましめなかつた、時には財界を談じ時局を評し、時には人物を論じ趣味修養を說いた、訪客は其崇高なる人格、靈氣ある言句、豐富なる思想に感動しない者はなかつたのである。

氏は居常質素儉約を重んじ、深く奢侈を戒められた、「よく、勿體ないなあと申されて、何物でも大層大事に使はれました」との夫人の言は、氏の質朴儉素を證するに足るであらう、己を持すること是の如きに拘らず、人を待つことの頗る厚かつたのを思ふとき、私の氏の人格敬慕の念は、益々其深さを加ふるのである。

氏は又夫人を信ずること頗る深く、家事萬端之を其處理に一任し、自らは專ら監督顧問の地位に立たれた、夫人も亦善く氏の旨を體して專心家政に努められた、氏が內顧の憂無く、身心を捧げて店務に從事せらるゝを得たのは、夫人內助の與つて大に力あらねばならぬ。

書籍は東西古今の知識の寶庫である、現代紳士の龜鑑として世の崇敬の的となられ、其身未だ嘗て一歩も異邦の土を踏まれたことの無きにも拘らず、能く中外の事情に通じて才識高遠であつたことは、是れ皆氏が、修養と趣味とに立脚し、忙中閑を求めて和漢洋各方面の書を涉獵せられた賜に外ならぬ、去年彌生の末つ方、一たび湯藥に親しむ身となられて後は、專ら慰安を書畫と讀書に求められた、そうして遂に病革つて現し世を去られる迄、僅か五十日ほどの間に、繙かれた各種の書籍は百冊を下らなかつた、病床に在つて猶ほ斯の如し、其讀書力實に驚嘆すべきである病中注文せられた圖書が、亡き後に續々到着して、佛前に淋しく積み重ねられたことの如きは、思出すだに涙の種である、嗚呼實に氏は斯の如く最後まで其向上の爲に努力せられた、そうして其高遠卓犖たる才識と高雅純潔なる德操とを懷いて、慌

しくも歸らぬ旅路に就かれたのである、どうして之が諦められやうか、忘られやうか。

氏と私との交渉は、大正四年四月、私の鈴木商店入店の日に始まつて居る、當日氏の前で入店の許可を受け、將來に關して諄々と懇切な注意を賜つた、私は氏の言動に一種の靈氣を感受すると同時に、强烈な敬慕の念を起したのであつた、然し當時私は、私が今日こゝに在るべく運命づけられて居やうとは、神ならぬ身の知る由もなかつたのである。

十四歳の時、民間飛行家萩野常三郎氏の墜落慘死に感ずる所あり、飛行家として身を皇國に捧げんとし、其助手伊崎氏に懇願したが、適材に非ずとて容れられず、失望落膽、遂に時の小學校長西山氏に謀つた、同氏は報國の道の一ならざるを說いて鈴木商店に入店を勸められた、私も深く悟る所があつたので、翻然志を變じ、遂に入店の運に至つたのである、井中の蛙が大海に飛込んだと言はうか、猿の接むてふ山國の一弱輩の眼には、扇港の風物總て是れ驚異であつた、布引寮の夜は更けて萬象寂々たるの時、獨り起出でゝ欄に倚り、眠れる神戸を眼下にして靜かに既往將來を

觀じては、餘りに自己の貧弱なるを悲み、無學の徒の遂に爲すなきを痛感し、心の駒は矢猛に逸つた、然も之を如何ともすることは出來なかつた、斃れて後已まんと最善を盡して運命の開拓に努力した、而も取り得たる手段は催に日々二時間餘の夜學あるのみであつた、限りなきもどかしさを感せずには居られなかつたが、矢張之をどうすることも出來なかつた。

同店受附に在ること約半ヶ年、其年十一月に至つて遂に輸出積出部專屬ボーイとなつた、積出部は當時最も多忙を極めた部であつた、東奔西走して殆ど席の暖まるのを許されなかつた、日曜日の半日さへ自由の身となり得たることは稀であつた、インヴオイス作製のタイプライターの響を聞きながら、ビーエルのコツピー取りに徹夜したことも一再ではなかつた、從つてせめてはと賴みにして居た學問向上の道……夜の通學も、缺席や遲刻勝ちで思ふ儘にならなかつた、けれども上下一致協力の結果は一家團欒の樂みにも優つて和氣靄然、部員にして不平の色を現すやうな者はなかつた、更に私に就て言へば、先輩は皆非常な同情を寄せられ、常に懇切指導を惜まれなかつたので、肉體上の苦痛も變じて精神上の悅樂となつた、當

時私は、眞に衷心の愉快を感じて獻身的に執務することが出來たのである。

其れは翌五年三月の末つ方の事であつた、輸出品の積出が多くて、ビーエルの作製で眼の廻る程忙しく、夜に入つても中々片附かない、而も船は翌朝未明に出帆することになつたと云ふ、是非共今晩ビーエルに支配人のサインを貰はなくてはならぬ、漸く午前一時に至つて全部揃へることが出來た、時の積出部主任川口氏は電話して、署名を乞はれた、快諾があつたので、早速私は自轉車を飛ばした、着けば既に門は開かれ應接室に通された、深更の訪問を謝して署名を乞ふと、西川氏は我部一同の勞苦に同情せられて、特に懇切なる御言葉があり、且私に對しては益々奮勵せよと申されて、過分の賜物……記念として大切に保存して居る……を授けられた、私は感奮せずに居られなかつた。

其年四月、私は復た氏の愛情に泣かねばならなかつた、不幸扁桃腺を病み、同店三階の寢室に休養するの已む無きに至つたときである、氏は多忙の身を以て日に二回迄も、慈愛の溢るゝ御言葉や、眞情の籠つた珍菓等を以て態々御見舞下された、彼は天下に名だたる大商店の支配人、此は畏しい其一小僧ではないか、私は病褥に在

つて唯感涙に咽ぶの外なかつた。ドアーを開けて「オイ今日はどうだ」と言ひながら入つて來られたあの風姿、嗚呼其れはもう長へに拜することが出來ないのだ……。

降りみ降らずみの六月の空が珍しくも晴れて、街には金魚屋の聲が朗かな日曜日の午後であつた。久し振りに早く仕事が終つたので、私は獨り事務室に殘つて夜學の復習に餘念なかつた。其時、既に歸宅せられたとばかり思つて居た氏が、突然私の前に其姿を現はされた。驚いて「何處に居られましたか」と聞けば「金子君の部屋に居たのだ」と云ふのが御返事であつた。二人の間には其れから、次のやうな會話が交された。

「えらい勉强だなあ、どうだ此頃は、夜合宿所へ歸つてからはどんなにして居るか」

「夜學が濟んでから掃除をして、それから徒步で歸るといくら早くても十時頃であります、入浴して少し勉强をしやうと思つても、此處彼處の部屋が騷がしいので思ふやうに出來ませぬ。朝早くと思つても、前日の疲勞でとても續きませぬ。ほんとにどうしたらよいかと思ひます。無學な者が此儘では前途の光明も望まれませぬ晝間と云つても御存じの通バタ々々して居りますので」

「そうか其れは困るだらうなあ、これから先は何と云つても實力だから、確かり勉強して力をつけねばならぬぞ、まあ出來るだけ時間を旨く利用して勉強する事だと云つて體が弱くてはいくら跪いて見ても仕方がないから、餘り無理も出來ないぞ、兎に角まあしつかりやるがよい……、今日はいつにない好い天氣だなあ、どうだ今から一つ諏訪山へでも行かないか」

「有難う御座います、併し今日はもう遲う御座いますから失禮致します」

此事あつて後一ヶ月、私は或日の正午應接室に呼出されたので、恐る々々入つて行つた。

「オリビア(布引合宿所)も隨分遠いし、其れに騷がしいやうでは勉強も出來にくいだらうから、夜分だけ宅へ來てはどうだ、幸ひ高商へ行つて居る人(當時本庄、今の松代和四郎氏)も居るから勉強するにも都合が好からう、夜學が濟めば直ぐ來ればよい、朝も起きると其儘店へ出れば、少しも店の仕事に差支へることはあるまい、宅の方ではちつとも厄介はかゝらぬのだからなあ」

「御親切に有難う御座います、そんなのでしたら誠に濟みませぬが遠慮なく御厄

介になりませう」

「それでは丁度明日は日曜だから、日野君によく言つて、オリビアを引拂つてやつて來るがよい」

六月十八日、此日こそ私には忘るべからざる紀念日の一である、午後五時頃座敷に通され、家庭の人としての氏に初めて接した時の光景、今猶ほ目のあたり見るやうである、數日の後氏は私を一室に招いて、大に知德修養の必要なることを說かれ若しお前に進んで學校へ行く氣があれば、喜んで遣つてやるがどうだと申された是れ私に取つては正に一大事であらねばならぬ、此岐路に立つた私は、其取る道の左右如何によつて、實に私の前途が劃然と明暗に區別せられるかのやうに感じた無論私は勉强したくて堪らなかつた、熟考した後御好意に甘えて御願したのであつた。

八月、鈴木商店を一旦退くこととし、氏の斡旋に依つて育英商業豫料二年に中途入學を許可せられた、幸ひ翌年三月に神港商業本科一年に補缺募集があつたので氏の承諾を得て受驗し、親友山根君と共に轉校したのである。

爾來三星霜、氏と其夫人の懇篤なる指導庇護に依り、大正九年三月私は同校卒業の榮を得た、氏は更に進んで神戸高商に入學せよと勸められた、私にはもう言葉は無かつた、只感涙あるのみであつた、必ず御心に副はんことを期して受驗したけれども、日々の成績は自ら顧みて隨分悲慘なものであつた、兎に角三日間の試驗は終を告げた、泣面に蜂と云ふのであらうか、試驗後の休養をする間もなく、故郷の母が病氣だと云ふ報が來た、驚いて歸つて見ると左程の事もなかつたので、安心して上神すると、再び喫驚せざるを得なかつたのである、嘗て缺勤せられたことの無い氏が、病床に臥して居られるではないか、頃日健康稍勝れ給はずとは承知して居たけれども、臥床を餘儀なくされる迄とは誰か思ひ設けやう。

けれども幸にして、其後逐日快方に赴かれ、これならば御全快の日も近きに在らうと、一同愁眉を開いたのであつた、彼の今では絶筆となつた北村氏宛の書信を認められた十三日頃は、元氣頗る旺盛で、醫師も數日にして庭園の散歩を許さうと言つた程であつた、此が嵐の前の靜寂であつたとは、神ならぬ身の誰か豫知し得やう病狀俄に變じて翌々十五日奄ち幽界の人となられたのである、どうして斷腸の思

に堪へ得られやうか……。

嗚呼蘚苔の下に眠れる者が幸であらうか、現世の無情の風に悲哀の涙を落す者が不幸であらうか、私は之に答へることが出來ない、只私は「逝く者を淋しく送つた心で殘る者は仲善くせねばならぬ」との親鸞上人の敎に從はんとする者である、私はもう多く言ふ必要は無い、私は私の責任を自覺して居る、私は氏の御志を知つて居る、そして私も男であるのだと强く心に叫ぶのみである、氏よ、どうぞ私等を長へに守つて下さい。

(六) 御葬送に陪して

山根仙之助

人生に悲痛事は限りありませぬ、併し其悲痛の最も大なるものの一つは、吾が恩人西川さんの死であります、御訃音に接する數日前、恩人を御病床にお訪ね申した時には、いと元氣な愉快氣な御口調で、「週日の後には店に出られると思つて居るがなあ」と申された、此御音容は今猶ほ眼につき耳に新たでありますのに、既に幽明境

を異にせられて、永劫再び相見ることが出來ないとは……思へば唯涙の外はありませぬ。

回顧しますれば、不肖が初めて故西川支配人の謦咳に接し得たのは、歐洲戰亂の勃發前で、鈴木商店が榮町三丁目に在つた時代の事であります、當時は只支配人と單なる一見習員との關係でありましたから、毎日お茶を差上げたり、お使走りをさせて戴いたり致しました位でありまして、格別取立てゝ記す程の事も御座いませぬが、極めて濃きお茶を召上つたことゝ、お前に侍つたときには、偉人の前の小人の常として、何となく一種異樣な感に打たれまして、語らんとして口澁り、爲さんとして手鈍つた事だけが、今も尙ほ腦裡深く染み込んで居ります。

恩人が何か御用事の際には、「ボンサン」とお呼びになるのが常でありましたので其時には我々見習員は、我先きに御用達するのを手柄の樣に思つて居たので御座いました、或時も、いつもの如くお呼びがありましたので、一番にお前に出ますと、突然「之をやらう」と一包の饅頭を下さつたので御座いました、私は饅頭を戴きに一番に馳參じたことになりましたので、有難くもあり極り惡くも感じたことで御座い

ました。

此極く詰らない事實の中にも、如何に當時の見習員が、恩人から御用命下さることを幸福と思つて居たかと云ふ一端が窺はれるのであります、何故に斯く迄見習員が心服して居たのでせう、其は單に支配人と見習員と云ふ關係に在るばかりでなく、恩人が一種名狀することの出來ない靈感の所有者で在らせられたからであります。

饅頭を頂戴して嬉しかつた頃、目は明きながら盲同樣の時代から、漸く長じて物の是非が解るやうになりました今日まで、玉のやうな温情と慈愛は、身分の高下と親疎を問はれないで、何かとお心盡し下され、御薫陶を被りました不肖に取りましては、慈父に別れた心地、暗夜に燈火を失つた感を禁ずることが出來ませぬ、知らず識らず熱涙が双頰を傳ふのであります。

大正九年五月廿三日、此日こそ私が一生を通じて忘れることの出來ない日であります、悲しや恩人の遺骨は、今や紅涙せきあへぬ遺族故舊に送られて、恩人が夢夜毎に繞らせられた宇治の山の第を後にせらるゝのであります、挽歌に代る自動車

の警笛、何の容赦もあらばこそ、愴然たる三千の葬客に迎へられて、程遠からぬ善福寺に入れられたのであります。

腸を斷つ讀經の響、場裡に漲るお香の香り、悲痛を告ぐる名士の弔詞、誰か血涙の全身に溢れ、哀悼の情に打たれない者がありませう、覺えず首垂れ涙落ちたのであります。

噫恩人西川さんは既に鐘聲夢冷かなる人となられたのであります、未亡人を初め愛兒達が香を手向けて、其冥福を祈られるいぢらしさを見て、誰か其胸臆に限りない悲哀を感じない者がありませう、座ろに萬斛同情の涙を禁じ得なかつたのは獨り私ばかりでありますまい。

噫恩人西川さんは今や在さず、正義人情の人、大膽なるビジネスマン、小兒の慈父青年の鼓動者、長者の慰誨者たりし恩人西川さんは今や亡し、早くも長逝せられて彼の萬人と齊しく其肉を地に還し給うたとは、思うても思うても悲しい限りで御座います、然しながら恩人は尚ほ在すのであります、恩人の生命は尚ほ其德望を讃する故舊親朋の中に活きさせ給ふのであります、後進者の正義人情の中にも、小兒

青年の胸臆の中にも、又彼の長者の記憶の中にも長へに新たでありませう。

然し私は存じて居ります、頌讃の辭を如何ほど盡し、哀悼の文を如何ほど飾り、萬斛の血涙を絞りましても、到底恩人在天の靈をお慰め申すことの出來ないのを、此上は何を以て恩人に感謝の意を致し、御生前の御鴻恩に酬いることが出來ませう今は唯恩人の遺された御教訓を遵守して、御德望をお慕ひ申す外は御座いませぬ其れにつけて思出されるのは、一タストーブを圍んで、和氣靄々として語られたあの御風貌であります、冐すことの出來ない嚴かな中に、言ひ知れない恩愛を込めて語られたあの御教訓であります。

「一心に一事に盡せ、そうすれば早晩已が標的に達することを得るであらう、空中に向つて矢を射るな、確かに一物を狙へ、狙うて之を放て、若し誤らば再三再四之を試みよ、そうして已が心の滿足する迄努力せよ、余は未だ曾て浮泛飄蕩兒の成功したのを聞かない」と。

噫此御教訓が尊き御遺訓にならうとは夢思ひませぬでした、私は恩人の面影を拜する度に、其御遺訓がありありと頭に浮んで參ります、嗚呼思うても思うても悲

しい極みであります。

(六七) 御慈愛深き西川さん

加藤富男

「事實は最善の雄辯である」と申します、さて私は故西川支配人にお事へ致しましてからの私の失敗、且感じた事、故人日常の事柄等、有の儘の事實を謹記して追懷の微衷を表したいと思ひます。

「加藤ッお茶」此言葉は西川さんを追懷する毎に、第一に私の頭に浮んで來る言葉です、あの力强い能く透る聲、今猶ほ耳に殘つて居ます、西川さんは大層お茶を好まれました、而も其お茶は濃いのでした、私が西川さんにお事へする樣になつた最初「西川さんは濃いお茶を汲むのだ」と先輩の人達から敎へられました。

入店してから間のないことでありました、ふとした機會で西川さんの愛用の湯呑の蓋を漆喰に落して破りました、仕舞つたと思つたがもう後の祭でありました拾ひ上げて見ると二ッに破れて居る、繼ぎ合せたが元の通になる筈がない、私は恨

めしく其破片を見つめました、何しろ入店以來最初の過失であつたので、唯叱られはすまいかとばかり心配して、何う言つてお詫して良いのやら分りませぬでした考へて考へ抜いた果に、有の儘を申上げて御許しを乞ふより外致し方が無いと決心しました、で恐る恐るおろ々々聲でお詫を申上げると、唯一聲「あゝさうか」とおつしやつた切りでありました、其時の嬉しかつたことは今でも覺えて居ます、其湯呑の模樣、其れは確か雙龍の玉を爭つて居るのであつたと記憶します。

西川さんは煙草を大層愛好せられました、其れで葉卷を口にせられないのを見たことはありませぬでした、西川さんの机の引出には、常に二函か三函の葉卷が藏はれてあつて、お客さんの見えられた時には、何時も其函を出して勸めて居られました、晩になつて灰皿を洗ふ時、葉卷の吸殼で灰皿は一杯になつて居ました。

アミダと云ふものを御存じでせう、此アミダが度々輸出部で行はれました、勿論私も其餘惠に浴しましたが、何時も私は西川さんの分を戴いて居りました、「加藤ッ」と呼ばれる「之を君にやるが、一度に食べんでもいゝぞ、一度に食ふと腹を惡くするからな……」と、恰も愛兒を諭さるゝ樣に言つて下さいました、「腹を惡くするとい

かぬから」此一語は私をどんなに喜ばしたことでせう、私は其菓子を獨りで戴くのが如何にも惜しい樣な氣がして、「此れは今日西川さんから戴いたものだが……」と云つて、西川さんの御恩惠を數人の友達に分ちました。

西川さんの眉毛は太くそして濃くありました、長い手紙を認めらるゝ時、コツピー鉛筆を持つた手で考へらるゝ暇々に、眉毛を撫でられてゐるのを見たことがあります、大抵の人は考物をするに何時も定つた樣に手を額にする、然るに西川さんは眉毛を撫でられる、其癖まで凡人のやうでないと思つて居ました。

(六) 斯の訓戒

小野禎一郎

故西川氏は資性溫厚篤實にして孝心特に深く、又能く部下を愛撫して一視同仁鈴木商店に入りし以來三十年一日の如く、專心力を同商店の事業に竭し、苟も一家の私事を顧みず、克く幾多の艱難を凌ぎ、終始奮鬪努力して已まざりしは、店員の齊しく敬服せる所、同商店今日の隆昌は、君が力與つて其多きに居ると言ふも過褒に

あらず。

氏曾て訓戒して曰く、人を使用する者は、單に其人を使用するに止めず、根本より養成する心懸けを以てせよと、我等顧みて斯の訓戒に負ふ所尠からざるを思ふと共に、同商店の今日ある、其由つて來る所深くして遠きものあるを知るなり。

今や鈴木商店の前途彌々多事にして氏に待つ所甚大なるものありしに、不幸病を獲、四十有七歳を一期として溘焉長逝し、遠大なる抱負の實現を見るに至らざりしは、獨り氏の爲に遺憾とする所なるのみならず、洵に邦家の一大損失として浩歎せざるを得ず、然れども其德風と功績とは長へに泯びず、濟々たる多數の店員は必ず氏の遺志を繼承し、著々之を事業の上に實現し、以て在天の英靈を慰する所あらん、氏亦以て瞑すべきなり。

(究) 半切紙のをしへ

宮崎好道

西川樣の書の非凡なりしは其人格の表現と見るべし、字を書く人には能筆にし

て達筆ならざるあり、達筆にして能筆ならざるあり、達にして雅ならざるあり、然るに西川様に至りては、眞に能と達と雅の三者を兼ね備へらる、造詣深きにあらざれば能はず、平素の執務嗜好に付ても、常に此三者の非凡なる表現は惰夫をして起たしむるものあり。

書を能くする人は紙筆等に意を注ぐ、一昨年の春、生の鄉里土佐産の質稍良と思ふ半切紙手に入りたるを以て、少許御試用を請ひたるに、其後數月を經て歸鄉中の生に、其品を更に一〆許り買求め送れとの書を寄せらる、生懌び直に紙店に至りて詮議す、唯遺憾なりしは前に送りし紙の見本を所持せざりしことなり、然し同一の店に至らば同質の品數多あるべしと思ひ、最上の同質と覺しき品を選び、墨附も調べたる上買求め送りたるに、圖らずも是れ同質の品にあらざりし、前の見本を添へ送返され、其墨附の相違を示さる、生恐懼措く能はず、復た紙店に至りて之を質したるに、其紙は冬季土用中に、特別に注意して製造したるものにて、今は品切となれり然し萬一殘品あるやも測られざれば、工場倉庫等十分に取調ぶべしといふ、乃ち此旨書面にて申上げたるに、左の御返事あり。

拜啓御多忙中度々御手數に相成多謝半切の件は御申聞の次第正に拜承致候格別今直にと申す譯に無之先日貴下より頂戴せしもの澤山有之候得共餘り優良なる品に付若幸ひ手に入れば御世話願度御厄介相掛候次第冬季に非ざれば上等の品出來ぬやうなれば其季節にて宜敷何卒可然御賴み置被下度此卷紙が其半切にて墨附といひ質といひ當地にては到底手に入り不申候先は當用迄草々

七月二十三日

後數日を經て、漸く其品一〆のみ發見したりとて紙店より持參し來る、正しく同質の品なり、直に之を送りたるに、今度は相違なき品なりとて御滿足の書面を拜し漸く安心したり、恥しながら生其頃まで、略ぼ同じ良質の半切にして墨附に斯くも相違あることを知らざりしかば、是に於て故人に敎へられたること大なりしを感ずると共に、故人が如何に和紙を吟味して愛用せられしか、如何に書翰紙の墨附等に注意せられしかを知れり、其雅趣に富ませられしこと床しき限なり。

御逝去のお悔みを申上げたる際未亡人は「彼の半切は尙ほ數多殘れり」と涙を催さる、紙も亦故人に永訣したるかと哀惜の情更に新なりき、御書面を入れられたる

支那製の風雅なる桃色の封筒に、墨色鮮かにものせられたる文字の、雄大にして古雅なる驚くべきものあり、椋野氏の手を經て惠まれし「瓊瑤廬帖」と共に、此御書翰は永久家に藏して、故人の德を偲び手習の師とせんかな。

(十五) 追憶

多賀二夫

近頃妄念切りに頭の中を往來する、其れが故人を憶ふと忽ち朝霧の晴渡る樣な心持になる、私が故人の心に見えたのは上海在勤の初めに北村和三郎氏を通じてであつた、其後逝かるゝ日迄の數年、私の故人から受けた敎訓と恩義とは到底筆に盡すべくもない、私が適々上海から歸朝中の大正九年五月、故人の逝かるゝ三日前に、其最近に起つた事から、胸に溢るゝ謝辭と告白とを秘めて、中山手の御邸に伺ひ約二時間に亘つて病室に雜談した、そして是非話さねばならぬ、又是非敎を乞はねばならぬ事は、故人の病後の痛はしい瘦れを見て、次の機會にと引込めた、其時にふと、故人がスリーキヤツスルの兩切煙草を燻らせて居らるゝのを見て驚いて、「そん

な煙草を喫はれても差支ないのですか」と問ふと、「君、煙草でも喫まねば退屈で仕方がないではないか」と答へられた、私は其言葉を通じて病痾の既に回復しつゝあるのを喜ぶと共に、十年否二十年一日の如く、孜々店務を視られた事より生れた故人の後天的性習から、如何に病床の一日が苦悩の種となりつゝあるかを思うて、痛ましうも敬虔の念の起るを禁じ得なかつた、そして辭去する時、今度お目にかゝる時は私の腸まで出して何もかも話さねばならぬと期した、其れが中二日をおいて十五日の土曜日、横濱で北村さんと晝飯を共にしつゝ故人の噂の最中に、長逝の悲報を電話で受けむとは……休す矣。

十六日朝、本店重役室の限りない憂愁に包まれた環座の中で、金子重役の口から「昨日死んだと聞いた時は左程でなかつたが、歸つて終夜考へると段々悲しくて、故人の死が何物にも替へられぬ樣に惜しくなつて來たよ」と話された、此言は、故人の死を追憶する人々の心の、代表的な言葉であると今でも憶ひ出す、然し私には、「惜しい」と云ふ言辭以外に「濟まぬ」と云ふ言辭がもつと必要である、實際逝かれる前年から最後の日迄、個人的に私程故人に厄介をかけたものはあるまい、春秋の筆法でゆ

けば、私が故人の壽命をお縮めしたと云はれても、毫も怨はない、故人の私に對する至情は、或は故人の其れの一部分だつたかも知れぬ、然し私は故人に對し、如何なる感謝の道を盡しても猶ほ足らぬと考へて居る。

故人とは遠くに離れて居つた關係上、重に文書の往復で知遇に感じて居つた私である、其ため故人の逸事とか逸話とか云ふものは知らぬ……寧ろ故人の總てが逸事逸話であつたと言ひたい……而も故人の晩年、特別の厄介と心配をかけた私は、一生忘れられぬ特別の一事がある、書けば此私の追憶に點睛の思を述べられるが、此れは私獨りが故人の靈に永久に謝すべきものと考へるから止める、

故人の靈は私の光明である、彼岸に達した時始めて、私が故人竝私を解して吳れる皆樣の恩に酬いらるゝと思ふ。

ほとゝきす地人ともに啼く五月やみ

亡き人のまほろしに問ひつこたへつゝ

とはのをしへをきかむとそおもふ

(七) 西川さんに對する自分の印象　西　岡　勢　七

自分が未だ鈴木商店の御厄介にならぬ以前、大阪の或問屋に居たときの事であるが、鈴木商店の商賣の數々の中で、其頃斯界の注目を惹いた大阪支店の澱粉、神戸本店の烏黐の買占は、自家の關係上殊更興味を持つて居た。

當初買込まれてから之を賣退かれた迄には、何れも相當の時日を過ごされた模樣で、當時澱粉は一時失敗された樣であつたが、後には轉禍爲福で、戰時中聯合國に之が大量輸出を行はれて、國家的重要貿易品とされた許りでなく、當時の損を何十百倍にして取返された。

烏黐も戰時に際會して値上りを受け、結局利益を收められたが、此烏黐が烏黐樽に足を入れた樣に、拔き差しならぬ事になつて困つて居られたとき、大阪では、「鈴木は烏黐の池を造つて、山の樣な烏黐が其中に浮いて居る」とか、「いや、脇ノ濱の濱を堀り込んで、海水を引いて其中に圍うてある」とか、大變な噂であつた、そんな噂もくた

びれて、何時まで經つても鈴木は賣らないと極まつた時分、自分はそろそろ大膽な事を目論だ「いかに腰强い鈴木でも、何時までも放り投げて置く譯には行くまい、此邊で一つ叩き落して呉れよう」と思ひ、先づ內地向として、當時概ね輸出向であつた手持の中から勝手撰りと云ふ條件で、當時の市價より少々高く最初一千罐だけ買約した。

小野濱の倉庫で之を樽に詰換へ、大阪に持込むと利が附いて賣れる、此れは面白いと思ひ、段々數の中から撰り出し撰り出して居る中に、最初思つた程も內地向上質のものが出て來ない、罐を切返し積下しやるけれど一向思はしからぬ、數は未だ買約の半にも充たぬ中、面白くなくなつて來た、そこで其翌日、出入のブローカーを立派な仲買人に仕立て、一々品撰りの處で散々品物をけなし付けさせた、大勢の仲仕は詰換への手を空しくしてぶつぶつ言うて居るし、それまでお人好であつた今の大段君が怒り出した、此處で話も出來ぬから店まで行つて呉れいと言ふ。

榮町二丁目の店に行つて見ると大段君が事情を述べ立てる、自分が理屈を附ける、一方は、內地向の條件附で買約したのに、あとには內地向として及第するものが

無いと言ひ、他方は、最初大凡見た上一千罐賣買の約束をしたのみならず、散々品物を荒して置いて、此後引取らぬとは怪しからぬ、平均として一千罐は引取れと言ふ段々事が大きくなつた、當時の對手は、今の横濱支店長北村和三郎君と、樟腦部主任楠瀬正一君であつたと記憶する。

其時まで向うむいて、一生懸命事務を執つて居た人が、突然後ろ向いて、

「何事かね」

と聞かれた、楠瀬君は諄々と述べる、自分も亦何人とも知らずに事情を述べた、ところが其人は頗る淡泊に又簡單に、

「取らねば仕方が無いじやないか、止め給へ」

とて、前の樣に復た事務を執り初められた。

自分は聊か拍子抜けがした、結局自分の思ひ通りになつたので、引取つただけの代金を拂うて店を出た、そうして電車道を通りながら、今の人の態度に頗る感心して、さすがに大店の態度であるなと思うた、側の男が何を考へて居るかと問ふから「いや、今の人の態度に感心して居る所だ」と答へたら「彼れが支配人の西川さんだ」と

教へて呉れた、自分が西川さんに對する第一印象は斯の時である。

其後自分は鈴木商店の人となつて、大阪に勤めて居たけれども、大正五年の夏、大阪支店から本店に轉任して、燐寸を擔任することになつた、次いで店が瀧川氏との合同で燐寸事業を經營することゝなり、瀧川燐寸會社は東洋燐寸會社となつた、合同條件に販賣を鈴木商店にやらせるといふ事があつたが、瀧川氏が實行せぬので燐寸の仕事が頗るプーアなものに思はれてならなかつた、一日、西川さんの所に出懸けて、盛んに鈴木商店の燐寸事業の前途に就いて論じたが、結局「儲からぬ」と結論された、其時まで默して聞いて居られた西川さんは、

「君は儲からぬといふ前提の下に仕事をして居るかね」

と、輕く覗き込まれた、其刹那、自分は愕然として覺めた、そうして其處に、ビジネスマンとして如何にもプーアな自分を見出して恐縮したことである。

大阪の店に居る時分に、本店と合同の大運動會が催された、櫻花爛漫の三芳野の春を探らんとしてである、當日は生憎雨催いであつたが、大阪のガイドをやらされた自分は、王子の停車場に立つて汽車乘換の斡旋をして居た時、後の方の車から、小

さき店員に取り卷かれながら、和氣靄々として嬉し相に來られた、同化的な西川さんを見たのである。

年を經て又大擧して高野山に遠足した時、橋本の小ぎたない宿屋で一夜を明かしたことがある、其時我々は離れの一室で五六の同僚と寢んだが、隣りの室では西川さんや芳川さんが寢まれた、處が何分大勢のことゝて、其夜の騷々しさはお話にならぬ、それでも自分はうとうとと眠りに就いたが、翌朝食事の時、西川さんは、御氣分の良い時によく見られた樣に、首を心もち傾けながら、滾れる樣な笑顔をされて

「君達は眠れたかね、昨夜眠むろと思うてもあつちの方で騷々しくて眠れなかつた」

と言はれたが、其れは、眠れなかつたこと其事が、却つて此等行事に於ける興味多きエピソードであるかの如く、さも心地よげに話されるのであつた、自分は家族的融合的な鈴木商店の氣分は、西川さんによつて代表されて居るなと、其時泌々思つたのである。

昨年の三月初旬であつた、倶樂部で店の在鄕軍人會の催があつて、六時過ぎに池

貫の別莊の下を上つて行つた、曲り角の交番所の屋根が見えるなと思つて居ると青年會館の方から西川さんがひよつこり來られた、其頃運動不足であるからと、車を廢して歩まれて居つた時分で、今から思へば、西川さんの病勢を彌が上にも募らせて居る最中であつた、其時のお顏色が非常に惡かつたので、車を停めて御樣子を聞くと「いや、大分よろしい」と言はれたが、物言はれるのも大儀相に見えた「お大事に」と計りでお別れしたが、惜しや此れが最後のお別れであつた、御逝去の前頃非常に御經過が良いとて喜んだ事や、悲報を得て驚倒した事も、今は一年前の夢と過ぎた。

梅雨に入らんとして、空模樣は怪し氣にも變つて來たと思うて居る中に、銀木犀の重り合つた葉々に大粒の雨がぽとりと來た、此朝故人追慕の情は切である、一念御冥福を祈りつゝ筆を擱く。

(三) 超發院を憶ふ

西山作右衛門

余は大正五年以來滿五年間知を辱うしたのであるが、徹頭徹尾親切な方であつ

たと感謝したい、如何に多忙な時でも、必ず數分間は割いて會談して吳れられた、余は其都度感激した、談ずる毎に何物か訓へらるゝ心地して、崇高なる人格に一度でも多く接したい氣がした、而して何となく懷しい慕はしい樣な感がするので、迷惑とは知りつゝ店へ行くと何時でも支配人室へ顏を出して邪魔したものだ、今は其れも叶はなくなつて、淋しいことである、追懷錄を編せられるゝに當り、支配人森衆郎氏から何か寄稿してはとのことであつた、業務に逐はれ勝て且余の不精な性質は、間に合はない迄に延ばして居たが、最後の一頁に入れてもらふことが出來るらしいので、思ひの儘を赤裸々に書いてみることにした。

一　眞の娛樂

余が丹波で小學校長たりし大正三年の頃、生徒の中に一人、頭腦明晰これこそ眞の秀才だと誰にも褒められて居たのがあつた、學校を卒業したけれども、家は赤貧ではなかつたが、家事に羈され高等の敎育を施さうともせず、徒に一年を過したのであつた。

余は默するに忍びず、鈴木商店の丁稚たらんことを勸めた、漸く承諾した、愈々田

舍兒が、大きな鈴木商店の丁稚の一員となつて働く身となつた、此儘で置くのは推薦した余の意思でない、一日上神して西川氏に「他の子供と必ず違ふ所があるを信じます、一ッ目をかけて使つてやつて下さい」と談じた、其れから數ヶ月後に出會つた時「如何にも彼れは普通の子とは變つてゐる、可愛い子だ、學校へ入りたいと言つてゐる、望もあるから、店から引取つて學校に入れやうと思ふが、家庭の承諾如何」とのことであつた、余は自分が救はれて出世した樣に嬉しかつた、早速話を進め愈々世話になることになつた、田舍出の彼れは、西川氏の熱い同情の下に同家の奇麗な一室を與へられ、學校へ通學する身となつた、勉强は彼れの最も好む所、忽ちにして成績優秀を示した、西川氏は益々寵愛、彼は益々努力、遂に級長は彼れの獨占となつた、高商の入學試驗にも見事勝利を占めて、今も其恩惠に浴し專心勉學中である、西川氏の彼れを愛せられたること實子に異ならず、彼れも亦其恩惠に感激し、只報恩をのみ想うて餘念はない。

又一女生にて、此れも稀なる秀才、不幸父なく資産なく、只徒に終らんとして居た之も依賴して承諾を得、西川家に入り、勉學の恩典に浴する身となつた、然るに不幸

本人病氣の爲に中途厚意を辭するに至つた、其他「學資の無い、將來見込ありと思ふ者は推薦せられよ、何人でも出來得る限り盡して見やう、人の世話と讀書は余の娯樂である」と言はれた、豈崇高なる娯樂ではないか、豈氣高き振舞ではないか、須らく男子として持ちたい娯樂である。

二　眞の奉仕

大正八年五月であつた、嘗て「教育上何か奉仕してよいことがあれば知らせて呉れ、應分の奉仕をする」とのことであつたから、田舍教員の見學旅行がさせて見たいと思ひ立ち、お宅を訪問したのであつた、柳田富士松氏の賛同をも得て、奉仕を受けたことを話すと、西川氏も大喜びで、それじや余も些かではあるが喜捨しやう決行されたいと、言下に數百圓を提供された、余は喜び勇んで歸國した、早速組合である六ケ校の職員へ檄を飛ばせ、日曜を幸ひに召集した、眼前に控えてをる挿秧休業に阪神地方へ見學旅行をしては如何、柳田、西川兩氏の厚意斯く々々と報告するや、一同歡喜溢るゝばかり、滿場一致異議のあらう筈はない、卽ち男教員四十五名は四泊五日にて阪神地方へ、女教員十八名は二泊三日にて京都及奈良高師へ、夫々參觀と

決定した、一同當日を持ち焦れた、余は男教員全部を率ゐて大阪に入り、新聞社、電話交換局、天滿硝子製造所、大阪電球會社、セルロイド會社、芦田電機製作所、尼ヶ崎市横濱電線、岸本製釘所を見て神戸に入り、神戸製鋼所、樟腦精製所、魚油工場、燐寸工場、監獄、製氷所、石鹸製造所、川崎造船所、稅關を見學し、加古川毛織會社、高砂製紙所及紡績工場を參觀し得た、其間鈴木商店よりも多大の便宜は勿論手厚き歡待を受け、一同感激したことであつた、西川氏に於ては前記喜捨の外更に援助せられ、厚惠の下に斯く有益なる視察を爲し得て、感激其極に達したのであつた、女教員一行の如きも年來の宿望を達し得て何れも感謝に滿ちて居た、是れ全く柳田、西川兩氏の厚意で此厚意なくんば此種の見學旅行は思ひも寄らぬこと、田舍の貧弱なる教育費では這般の企ては一寸不可能である、然るに、兩氏の厚意に依り地方教員の思想上に多大の刺戟と好資料とを與へられたのは謝するにも辭がない程である。

余が教員組合長として空前の面目を施し、一同より感謝の胴上げをせられたのも、實に兩氏の恩惠である、鈴木商店山手倶樂部の中庭に於ての記念撮影は、一同の永久に忘れ難いものであるが、今や西川氏逝かれ感慨無量である。

余は敍上の外、書くべき多くの感謝を持つてゐるものである、噫崇高なるあの人格に再び接し得ざるか、せめては御遺族に恙もあらせられず、幸多くあれかしと祈りて止まぬものである。

(三) 追懷餘噫

森　衆郎

人生五十を定命とする、然るに君は四十七歳で永眠した、是れ果して天命を全うしたものであらうか、君の病中の主治醫たりし松永氏は、

謹直なる君の性質に適はしき、相當の人格を具へた看護婦を得ることが困難であつた、故に令室京子氏が日夜病床に附き切りてあつた。

箇樣に浩嘆の言を漏して居る、寔に此一節は君の人物を躍如たらしむる樣に思ふのである、此の如く君の性格をも看破する位の國手が診脈加療したのだから、治療上に於ては萬遺漏はなかつたと思ふ、左すれは常に健康無病を誇りとして居つた君が、人生の定命にも達しないで、永眠したことは果して天壽を全うしたものであ

らうか、蓋し天命を以て長逝したものであらう、斯く斷定せねば解決が附かぬ、めが出來ぬ、其性格すらも看破する國手が臨床投藥したのだから。

余は木堂翰墨談を愛讀する、

其餘の役人連中の字は、爵位の肩書を除いては通用せぬ。

同書中に右の如き警句がある、余は是より君の支配人たりし地位を聯想する、過言であるかは知らぬが、諸會社商店の支配人は其肩書に依つて通用する人物が過半數である、余も亦正しく其一員であるが、此點に於て君は肩書なきも先天的に支配人たる人物であつた、其淸廉高潔にして寡慾なる、其風采の端麗にして容儀の上品なる、其頭腦の明晰にして機敏なる、其手腕の非凡にして計數に長じたる、其然諾を重んじて約束禮儀を缺かさざる、其品行方正にして謹直なる、謙遜にして威嚴ある其活潑にして執拗ならざる、其坦懷宏量、愛憎の念毫もなくして一視同仁の溫情ある、其困難に遭遇するも責任を重んじ、百折不撓の忍耐力を有する、其中正公平にして公私の區別截然たる、眞に何一つ缺點はない、唯紳士と云ふ一點より見るも、世の自稱紳士實は簇張(紳士張)とは其選を異にする、況して高等の敎育を受けて學和漢

洋を兼ね、筆札殊に佳麗、而も丁稚奉公より始めて看貫荷渡記帳より敲き上げた人物である、寔に先天的支配人たる資格を具有して居るではないか、所謂紳士の典型ではあるまいか、元の伯顔は廉希憲を悼みて、宰相中の眞宰相男子中の眞男子と評して居るが、余は君こそ支配人中の眞支配人、紳士中の眞紳士と思ふのである。

君を生みたる兩尊は固より尋常人でなかつたであらう、併し君は幼少時代より叔氏文三郎翁の教導に負ふ所が多かつた樣である、君の令弟芳太郎君の追慕記中にも、君が遊學の爲め東京へ出立する際に、叔氏が君に對しての別辭として、

文藏、東京へ行くのは唯單に此上の學問をする爲めでない、大商人になる資格と其呼吸を覺えに行くのであるから、能く頭に入れ夢にも忘れぬ樣にせよ。

斯く述べてある、折柄余は、君が東京遊學中に、親戚知人朋友より受領した手紙を、君が明治二十五年一月六日の夜に整理した來翰集なる一部の冊子を、君の鄕里の今津の生家より借受けて通覽した、其中に叔氏が君に送られた書翰が數通ある、乃ち君を偲ぶ資料として其二三を左に紹介する。

拜啓陳者時候逐々寒冷を催し候處其許殿不相變御壯健にて日々勤學被致候趣

一統滿足致候

一其許殿に於ても御如才は有間敷候得共充分學問に勉强被致日本の商人と相成て莫大の利益を得國家に名を揚るに厲精心相忘れさる樣肝要也（下略）

十二月十三日　　西川文三郎

西川文三殿

時候春暖之節御座候處其許殿無事勤學被致由安心仕候當地も別段相變候事無之家内一統及親族方に至迄無事消光罷在御休心可被成下候過日被申越佳人之奇遇書籍北村御僧へ買求御依頼申上候處御心當有之由にて夫々御聞合被成下候處折節賣捌濟にて只今品無之由御咄し有之を小林忍人氏北村氏より委細御聞取にて私者所持致處最早不用に付汝へ進呈可致旨被仰候に付無遠慮頂戴致大津迄持歸候處折節京橋區靈岸嶋銀町貳丁目住居木村矢尾吉殿に面會致送達方御頼申置候間不日到着可致と遠察仕候間御手隙の節小林氏へ御禮の書面差出被置候（下略）

四月二十四日

叔父　文三郎

甥　文造殿

拜啓陳者本年は近年稀成寒氣强候處去る二十日より快晴續き漸く春暖相催折柄荒木氏御一統幷に其許殿御機嫌克被爲在候條奉賀候次に當方一統及親族至迄無異消光罷在候間御休心可被成下候

一其許日々勤學勉强被致由拙者於ても大に萬望不過之明治社會の世に日本の男子と生れ內外に力を振舞國家を富る勵心不忘樣肝要也

一今度大津今瓦町高谷惣七殿東上被致に付近江商人及ロヤルスイトン三冊送達方依賴致置候間近日の內到着可致候間此段御承知有之候尙其節同君止宿御尋置被成下候て御送に相成品有之候得者止宿先迄挨拶旁々御賴に被參候

（下略）

一來月早々嶋村幸治郎殿東上被致候節今度御申越相成品及荒木御主人へ何も宜敷看進上致度に付其際には遞送可仕候且亦神戸文之介より申越には西國

立志編の本差送吳候樣申參候得共家の本箱には見當り不申貴殿持參被致候得者宜敷候乍併貴殿持參被致不用に候得者此便へ御送相成候先者右用相尋旁久々申上候也

二月二十六日　　文三郎

西川文造殿

尙々荒木御主人幷御家族御中へ宜敷御傳聲可被成下候樣賴入候

孝悌なる君に先づ鄕閭の平安を報じて安心を與へ、而して君を激勵するの文句より、書籍の周旋、讀去讀來寔に情致の津々たるを覺ゆるではないか、殊に君が遊學中寄寓せし照降町の荒木氏に對する叔氏の注意は、取りも直さず君に對する熱誠を披瀝したのである、君の大成は固より君の勉强努力に在りしことは勿論であるが其叔氏に負ふ所も鮮少ではあるまいかと信ずる。

君は又祖父文左衞門翁の唯一の愛孫で、頗る其氣に入りてあつた、當時翁の秘密の養老金の監督迄爲て居つたと云ふことである、想ふに翁が之を放資して利殖を

圖られた其管理を遣つたものではあるまいか、之を見ても君の明敏で計數に達者であつたことの偶然でないことが分るのである、此祖翁は天保十二年二月に本家西川文右衞門氏より分家せられたもので、本家は酒油の小賣に雜穀を取扱ひ、祖翁は米穀薪炭肥料を商業とし、爾來斯業を繼承して當代に及んで居る、而して現主人は卽ち君の季弟である。

君の書翰文に就ては誰れ言ふとなく天下一品の稱がある、其堪能なりしことは此一語で盡きて居る、平易にして輕妙、流暢婉曲にして達意の筆を運ぶ中にも、往々譬喩を用ひて「あつと」首肯せしむる所抔、書信の境地を超越して其人と對話するかの如くに感じたこともある、而して君は、私信には往々姓を略して文藏と署せしことはあつたが、餘り雅號は用ひなかつた樣である、併し學生時代に、牙城と稱し嘯月と號した時分のことは、固より余の知る所でない、脩竹は君の最も晩年の號である。

君は學生時代より能文であつた樣である、東京高商在學中も、手紙を書いて書きまくつて、在鄕縣の舊學友に對し攻勢を取つて應酬したものらしい、其來翰集を見ると、何れも返信の遲延せしことを謝して居らぬものはない、又舊學友たりし大音

翠嶺子が英名錄なるものを拵へるから迚、君に折入て其序文を起草せんことを賴んだことも見えて居る、乃ち之を見ても君が少壯時代より能文であつたことが分る。

高等の學校に在る人で傍ら書を稽古すると云ふが如きは、絕無と云うてよい、況して近來は特に然りである、然るに君は高等商業入學當時に於ても、大に臨池に沒頭した樣である、君の一友人は書を寄せて、其筆蹟の上達を激賞した一節が、來翰集中に見えて居る、君の能書は大に根抵ありと云つて可い。

君の手紙を書くことの早かつたことは誰も知て居るが、此は畢竟君の頭腦の明晰と、用意の周到と手腕の敏速とに在つたかと思ふのである、簡單なるものは實に一分間の筆勞であつたが、複雜にして込入つたものは、必ず机上のメモに書信の綱領たるへき標目を一點書とし、之に依り順序を逐うて綴つたものである、是れ文法に所謂間架結構である、但し君が之を遣つた場合は、餘程込入つた長文の書翰を愼重に書する場合であつたから、之を知る者は恐らく少いと余は信じて居る、君が鉛槧を揮うて書翰を綴り、意到筆隨ふときは咳聲を頻發した、想ふに神氣の亢奮し來

る結果であらう、而して余は一氣呵成とは此處であると常に感じて居つた、大抵の書翰は、愛好する莨を喫して結構間架を腦中で組織したものである、君の喫煙量も書翰を認むる件數と共に增減した樣である。卽ち終日手紙を書くから、莨も絕えず喫み續けたと申して可いのである、莨には人も知る如く、相思草とか返魂草とか返魂烟とか其外澤山に異名がある、詩人森春濤翁三國港雜詞中の一絕に、嬌口輕吹返魂草、煙中幻出意中人と云ふ名句がある、想ふに君が莨好の葉卷を喫し、引き締つた口頭より煙を吹出した時には、心機一轉、順序を逐うて陳ぶべき文句、次に書くべき手紙の綱領が煙中に幻出したであらうと何時も想像したことである、乃ち君なれば煙中幻出意中文とも言ひたいのである。

余は常に思うて居つた、君は往年軟文學を耽讀したのであるまいかと、乃ち君の書翰文は究竟軟文學に修養がなければ書けないと思はるゝ調子がある、然るに此度君の生家に、君の少壯時代に愛讀した書籍目錄を得て、余の推測の過らなかつたことを知つた、今其二三の書目を列記すれば、其磧自笑傑作集、人情本傑作集、其他膝栗毛より、西鶴全集、近松世話淨瑠璃集は勿論、時代物も併存し、八犬傳、西游記、弓張月

夢想兵衞、和莊兵衞等は其重なるものである、嗚呼是れ有る哉である、如何に能文の人と雖も、蘊蓄なくして書き得ざることは之を以て知ることが出來るのである。

故人上田觀水翁が君を評したことがある、曰く面白き人なりと、而して曰く人間絶對に間違ないとは云へぬ、然るに君は今日に至る迄余(觀水翁)に命ずる所に於て唯の一度も間違はなかつた、偶々間違ありと氣附きし場合は、却て余(觀水翁)の勘違にてありき、豈面白き人ならずやと、君の頭腦の明晰は此評て畫龍點睛の感がある從て常に物事を理智上より判斷した傾向があつて、蠻的の行動態度は少しもなかつた、左れば商賣の方針も、多くは策略を弄せずして推理計數より打算し、之に機敏を加味して、寧ろ小心翼々として遣つた樣に思はれる、其大膽に大規模に出懸けたときは、卽ち數字を基礎として大仕掛を有利なりと斷定した時である、永年鈴木商店の商事に參與して些の違算なかりしは、君が手腕一徹の士てなくして斯る賢明なる思慮を有して居つたからである。

君は他人の着用品に曾て目を觸れなかつた、又曾て其好惡の評をも下したことを聞かなかつた、此調子て餘り對他的の批評はせなかつた、人を輕易に月旦すること

とは非常に謹愼した、而して之を評量する場合は、全く感情を去つて斷乎たる確信の存するときであつた、若し偶々之を批評しても、必ず自己に其缺點を有せざる場合であつた、世には自己の傲岸尊大を知らずして、人の傲岸尊大を誹る者もある、自分の無作法なるに氣附かずして、他の無作法を笑ふ者もある、君には決して斯ることを見なかつた、先づ自己の缺點を自覺し之を匡正して、然る後他の不都合を敎督釋誨すると云ふ風であつた、偶々陰に惡口を言ふ場合があつても、野卑な言葉を用ひたことは曾てない、蓋し自ら知るの明ある者でなければ出來ぬ行爲であると余は常に感心して居つた、衆人の深く君子人として敬慕して居つたのは、是等の點も大に與つて力あつたであらう、其漆黑にして凉しく、温乎として文氣ある眉目は、一種名狀し得ざる慈愛を表現して居つた、此れも大なる引力があつたと同時に感化を與へたものであらう。

君の用意の周到は、內外公私大小に涉り、是又徹底的であつた、今余の知得する三四を擧ぐれば、君の先考の葬儀には神戸より數多の人が會葬した、今津は町とは云ふものゝ實は田舍である、左れば是等會葬者は、旅館の事抔多少念頭に留めて出立

した、然るに一行が今津に着するや、君は之を直に一割烹店に邀飲した、一行會葬を終へて辭去するに當り、君は西江州の名物鯉を折詰として、途中の行厨に迚各員に贈與したのである、歸來一行の一員は曰く、會葬よりも御馳走を頂戴に行つた樣なものであると。

用意周到て几帳面は一頭地を抜いて居つた、君が執務中に歸宅して處理すべき事件あるに想到するや、直に机上のメモに記して之を服嚢に投入したものである其之を容るゝや、一攫して詰込むを常とした、余は机邊に時々之を傍觀して、折りて容れず攫んで入れる、君の几帳面には不似合の事と思ふて居つた、何ぞ知らんや、小紙片を疊みて入るれば、折角の心覺も歸來服嚢中指頭に觸れない場合がある、左れば君は殊更に攫んで投げ込むことが分つた、用意の周到も此に至れば幾んど入神ではあるまいか。

指圖すべき場合も碌々指圖せず、豫め熟談協商すべき筈であるのに染々協議もせないで、間違の起つたときは、自己の不注意不行屆を棚に上げて、他の失策や手落を責むるは世間隨分有勝の事である、箇樣の場合に於ける君の注意の周到は實に